



## 新年のご挨拶

石原重利\*

会員の皆様、あけましておめでとうございます。

日本鉄鋼協会はここに創立 70 周年の新年を迎えました。過去長い年月に亘り、幾多の変遷がありましたが、協会として活発な活動を展開し着実に実績を積み重ねて参りましたのも、一重に幾多の先輩ならびに会員諸兄の一方ならぬご尽力の賜物と深く感謝する次第であります。本年 4 月には 70 周年を祝う記念行事がありますが、年を通じて協会の活動を更に実りあるものとしてゆきたいと念願しております。

新春にあたり昨年一年をいささか回顧してみたいと思います。

本会の主要行事である講演大会は昨年も極めて盛大に行われました。発表講演数は春秋合わせて 1492 件に達し、内容も理論的なものから実践的なものまで非常に多岐に亘りかつ高度なものとなつてきております。また特定テーマによる討論会も 9 の主題を数え、研究者・技術者の相互啓発に大きく寄与致しました。

一方業界を中心とする技術交流・相互研さんの場である共同研究会は 18 の部会より成り、分科会もふくめて 109 回の会合をもつなど、昨年もまた活発な発表討議が行われ、我が国鉄鋼業発展の一翼を担いました。特に若い世代の技術者にとつては研さんの場として技術革新の温床となつております。「競争と協調」この言葉は大きな意義をもつていると考えております。

なお、各支部におきましても活発な活動がありました。講演大会、共同研究会あるいは支部会合、いずれも技術の進歩を促す対話・討論の場であり、今後とも対話の盛んな協会を指向して参りたいと考えております。

機関紙「鉄と鋼」ならびに「Trans. ISIJ」もますます充実し、国際的にも高い評価を得つつあります。今後とも研究発表のあるいは情報交流の場として、会員各位の積極的関与をお願いしたいと考える次第です。

鉄鋼に関する基礎的研究を行う場として設けられている「鉄鋼基礎共同研究会」ならびに「特定基礎研究会」は現在 7 テーマについて採り上げており、大きな成果が期待されます。昨年は「介在物の形態制御」および「鉄鋼材料の摩耗」についての研究部会が終結し、いずれも鉄鋼技術の発展に大きく貢献するものと期待されております。

高温強度研究委員会を初めとする各種委員会も、地道な活動をつづけ、成果をあげつつあると聞いております。また「鉄鋼技術情報センター」も JICST への文献インプットなど、鉄鋼技術研究へのベーシックな貢献を行つており、標準化委員会の活動と共に、評価されるところであります。

鉄鋼技術の国際交流もまた協会の果たすべき役割の一つであります。日本の鉄鋼業ならびに鉄鋼技術の世界的ポジションからみて、協会としても逐年国際交流への努力を傾注しております。昨年はたまた

\* 本会会長 新日本製鉄(株)副社長

ま日独 Symposium のみでしたが、非常に成功裏に終始致しました。本年は第 3 回日中鉄鋼学術会議 (4 月洛陽) 第 10 回日ソ製鋼物理化学 Symposium (6 月東京) ならびに第 3 回鉄鋼圧延国際会議 (9 月東京) が予定されており、会員の皆様の積極的貢献により成果を挙げたいものと思っております。日本の鉄鋼を理解して貰うには同時に日本を理解して貰う必要があると私は考えますが、このような観点から今後さらに国際交流を積極的に進めて行きたいと考えております。

ISO 事務局業務も順調に推移しております。これは鉄鋼に関する国際標準化の仕事を世界を代表して担当しているわけですが、仄聞する所によりますと、その業務の遂行について各国から賛辞をうけているとのことで、たいへん喜ばしく思っております。今後とも関係者の皆様のいつそうの努力を御願ひする次第です。

以上概観しましたように、協会の活動は順調に進められ、この一年大きな足跡を残しました。実際にお世話をいただいております役員・委員および事務局の方々に本紙上を借りて厚く御礼申し上げるとともに、今後ともよろしくお願い致したく存じます。

ご高承のごとく、現在世界の鉄鋼業はたいへん困難な時を迎えております。日本もまた例外ではありません。これはオイル・ショックに端を発した世界経済の低迷とその構造的変化あるいは価値観の変遷などいろいろな要因が複雑にかかわりあつていられると考えられ、従つて将来への展望も不透明な点が少なくなくむずかしい面が多いようですが、素材としての特性及びその経済的価値を考えますと、鉄鋼は依然として経済活動にも社会生活にも必要な素材でありつづけなければならないと考えます。鉄鋼業の衰退は許されてよいことではありません。我々はあらゆる努力を傾注して鉄鋼業に安泰と繁栄を齎すべきであります。

このためには、日本鉄鋼業としては従来にもまして技術の開発をすすめ、その成果を生産の中に投入して合理化を推進していくと共に、より良き品質、より有用性ある品質を追及してゆくことが肝要でありましょう。そしてまた、このような技術的展開は世界の鉄鋼業の発展にもそのまま寄与していくことになりましょう。我々の置かれている立場は誠に重大であります。

前にも概括したように、日本鉄鋼協会の諸活動はよく機能していると考えます。本年もまた基本的にはこの路線に従つて進めていけば良いと思っております。しかし日本鉄鋼業の有り様これからのことを考えますと、協会としても、中長期展望の下に、より効率のよいあるいは真に鉄鋼技術の向上に寄与するようなやり方を常に検討していつてほしいと念願するものです。例えば、研究発表などの活動は従来は鉄鋼の Process, Product を主体にしておりましたが、このたび鉄とは異なつた新しい材料も採り上げることといたしました。これは鉄鋼はいずれ新しい材料あるいは先端技術と深い関わりをもつことは必至と考えるからでもあります。また産学の連携の強化もこれ以上やりようがないのかどうか協会として息長く検討していくべき主題と思ひます。協会は会員のためのものであり、会員は協会の活動を更にもりあげることによつて新しく研さんに励むという風に理解するものです。

終わりに学術と技術の調和による日本鉄鋼業発展のため、今後の皆様のいつそうのご健勝と協会のますますの活動を祈念いたしまして新年のご挨拶といたします。